

## 呉昌碩と白石六三郎

—近代日中文化交流の側面—

松 村 茂 樹

はじめに

中国最後の文人とまで称される呉昌碩<sup>（一八四四—一九二七）</sup>は、晩年、当時の上海共同租界の中にあつた北山西路吉慶里九二三号という地点に住んでおり、虹口<sup>（ハシキウ）</sup>と呼ばれていた日本人居住区に程近かつた（図①参照）こともあいまつて、多くの日本人と交流している。中でも上海随一の日本料亭であつた六三園<sup>（ろくさんえん）</sup>の主人・白石六三郎<sup>（一八六八—一九三四）</sup>との交誼はとりわけ厚く、呉昌碩の詩文にも六三園および白石にまつわるものが少なくない。

本稿はこの二人の交誼の重要性を明らかにしようとするものであるが、その順序として、まず白石六三郎の事跡について述べてから、呉昌碩との関係を論じ、更には白石が呉昌碩にかなる影響を与えたのかをも考えてみることにしたい。このことにより、当時の日中文化交流の側面が窺えるばかりでなく、呉昌碩という偉大な人物を陰で支えた一人の日本人の業績に光をあてることが可能となるはずである。

### 一、白石六三郎と六三亭、六三花園

白石六三郎の生い立ちについて、長崎新聞編集委員・広田助利氏は次のように記している<sup>（一）</sup>。

旧姓を武藤といった六三郎は、慶応四年<sup>（二）</sup>ごろ長崎に生まれた。家が貧しく、子供のころミカン売りなどをして苦勞をなめた。聞かん気の強い少年であつたという。二十一、二歳のころ、上海・香港航路の外国船に血流いとして乗り組み、やがて上海に住む。妻の白石スエは南高来郡の出身。明治三十年秋、のちの文路マーケットの一角に、うどん主体の小さな飲食店三六庵を始めた。包丁をとる手に、時にほうきも握って刻苦精勵、そのかいあつて、飲食店経営は大当たりをとつた。

次に六三亭という料理屋を開業した。三十三年ごろである。女性従業員を雇うのに苦心した。困つた末、養子にした男児に女のかつらをかぶせて店に出したこともあつたという。そのうち、芸妓も六、七人置くまでになつた。うち小六という妓は評判の美人で、時の郵便局長は彼女に熱を上げ、あげくの果ては公金を使い込み、上海中のうわさになる。この六三亭も、在留邦人の増加とともに次第に繁盛し、四十年には租界外である江湾路の一角に土地六千坪を買い求め、料亭六三亭の支店として、純日本式庭園をもつ六三花園を造る。

この記述は、当時御健在であつた六三郎の孫・白石明氏の証言をもとにして行つた<sup>（三）</sup>。

こうして白石六三郎は六三亭および六三花園の経営者となるわけであるが、この二つの料亭の変遷について、薛理勇氏が「六三花園和花園路」の中で詳しく述べておられる。これによると、清末の光緒年間にはすでに存在していた「東洋茶社」（日本料亭）の三盛楼が、風紀の乱れから日本の駐上海領事によって閉鎖させられた後、その址地を白石六三郎が手に入れ、日本人専門の旅館・六三亭を建てた。ところが一八九四年の日清戦争直前には上海の日本人が減り、経営難となった六三亭は総面積の半分近くにもなる西側部分を工部局に売却したが、日清戦争後、日本人が急激に増加し、六三亭だけでは需要に応じきれなくなったため、乍浦路に新六三を建てると共に、六三亭には旅館の他に料亭や娯楽施設を設けた。そして白石六三郎は更に閘北、つまり上海の北の郊外に日本庭園をそなえた純和風料亭である六三花園を開いた。その後、六三亭は一九二〇年代の中期、日本の漢口銀行に買収され、漢口公寓が建てられ（現在の塘沽路三一〇—三三〇号）、新六三は一九四五年、国民党が接収して「軍之友倶楽部」と「軍友廣播電台」とし、中華人民共和国成立後、前者は工場となり（現在の乍浦路一八〇弄）、後者は民家となった（現在の乍浦路一七二号）。また六三花園は一九三〇年代以後、日本軍の校舎となり、日中戦争時に破壊され、中華人民共和国成立後、工場となった（現在の江湾路二四〇号付近）。ちなみに、現在、虹口公園の西南にある花園路は六三花園にちなむ地名であるという。

この薛氏の文章を見る限りでは、六三亭や六三花園の跡をとどめるようなものは「花園路」という地名のみのような感じを受けるのであるが、実は六三花園の門石が今も残されているという。この門石にはエピソードがある。一九二八年十一月四日付『上海日報』『上海之人物と事業』(図②)によると、

明治四十二年、総領事館が改築せられる際、従来の門石及び煉瓦、用石等は、悉く支那人に払下ぐる事となったが、之を聞知した

る白石氏は苟且にも帝國総領事館に用ひられたる由緒深き門石を支那人に渡すに忍びずとして、門石は勿論、瓦、鉄扉まで時の永瀆総領事に乞ふて之を大切に保管することにした。現在、六三花園正面入口の石門こそ実に当時総領事館の門石である。其後、長尾雨山氏の来滬を機に、門石の来歴を刻して永遠に之を保存することになったと云ふ。  
(原文は総ルビ。一部句読点を補った)

とのことで、この門石が現存しているのである。また、吳昌碩と親交のあった長尾雨山の撰になる来歴を記した文が刻されていたことも窺えるが、これについては確認し得ていない。

さて、六三亭および六三花園の成功により、白石六三郎の名は大正初年(民国初年)にはすでに大いにとどろいていたらしい。漢学者・高瀨惺軒は「支那游記」の中に次のような記述を残している。

(大正二年) 六月末日。杉原鼓沢、坂本潤来訪。(中略)(杉原鼓沢) 又曰く、今日上海にて第一の日本旅館豊陽館主人は、嘗て東和洋行にてボーイを為り居りし者にて、上海第一の日本料理店六三亭主人は、シンガポールにて某館のボーイを為し居り、其時子が其旅館に止宿し、六三は予の為に飯を盛りて給仕せしこともあり、(中略) 蓋し白石六三郎は元はボーイなりしも、着々成功して今日の盛大を致し、鼓沢は依然として呉下の鼓沢にて、志は大なるも事之に報いず。六三の報恩の厚情にて歓迎優遇を為しつつあるものならん。

大正二年は一九一三年にあたり、ちょうどこの年、吳昌碩は書画の弟子である王一亭の紹介で前述の上海吉慶里に終の居を定めている。王一亭は日本の日清汽船株式会社上海支社の買弁を勤めており、上海の日本人社会に深く通じていた人なので、早くから六三亭や六三花園の常客であったらしい。よっておそらくは王一亭に連れられ、吳昌碩はこの頃から六三亭や六三花園に通い始めたものと思われる。

ちなみに呉昌碩は六三亭と六三花園を区別せず、共に六三園と称していたようだが、呉昌碩のお気に入りには六三花園の方であつたらしく、呉昌碩のいう六三園はそのほとんどが六三花園のことを指していると考えたいと思う。よつて以下、呉昌碩との関係を述べるにあたり、呉昌碩に合わせ、六三花園を六三園と略称することにしたい。

## 二、呉昌碩と六三園での個展

呉昌碩は一九一四年の十月十六日（陰曆）、「六三園記」<sup>(9)</sup>という一文をしたためており、この一文からは呉昌碩の六三園への思い入れがよく窺える。全文を訳出しておこう。

黄浦江の西、呉淞江の北は、高い瓦ぶきの家が軒を連ね、空地などないかのようであるのに、うまくこの地の事情に合わせて池や沼を作り、樹を植えて亭や榭をしつらえているのが、白石鹿叟（鹿叟は白石六三郎の号）の築いた六三園である。

鹿叟は日本人なので、園の体裁はひとえにその国の習いに従っている。来游者はその国に行つたことがないので、はじめのうちには園であることがわからない。おそらく建築物が素朴さを特長としており、世間で言うところの園林と根本的に異っているからであらう。

園の周囲には、背の低い垣がめぐらされ、その曲がりくねつたところは間垣で補われている。門を入ると低木があり、園名を書いた勝がある。小道に沿つて西に折れると園の南の隅で、低い閣や小さな窠がその中に雑然と配置されている。建物はそのほとんどが木で造られており、あるものなどは切つた竹を瓦に代えており、陶製の瓦を必要としない。一つ一つの扉や椽に古朴なおもむきがそなわっているのは、おそらく竹や木で作られており、一切彫飾が加えられていないからであらう。ただ、中に一つだけ朱色の漆が塗られた建物があるのだが、これはもともと日本の習俗によるのであ

る。琴閣、□（欠字、以下同）、聽鶴軒、□と、これらの建物の楹や椽に勝がなされている。園の西に沿つて、南から北へ向うと、竹がとりわけ繁茂し、水が集まつて沢をなしている。中にはあるいわゆる濠梁や流觴の曲水は、まさしくわが国の名勝に倣つたものである。その水を金網で囲い、とても多くの水鳥を飼っている。また、二羽の鶴がおり、これも囲いを建てて棲まわせている。来游者がいたずらをしようにとさえ思わなければ、鶴はゆつくりと人に近づいて来る。かたわらに亭があり、私とその勝に枯笠と書している。また他に二つの亭があり、いわゆる□である。園中には神社がひらかれている。おそらく日本の民間祭祀の場所なのであらう。旗竿が木立ちの外にあげられており、境内は極めて静肅、ここを過る者は皆うやうやしく礼をする。神社を経て導かれるままに東へ行くくと、一つの橋を渡る。橋はセメントで作られており、石のように堅くて汚れない。水のかたわらには土の地面があり、雑然と草や木が栽培されており、中に銅でできた鶴が置かれてある。更に折れて北へ行くと、鳥の両翼をひろげたかのような楼があり、全園の優美を統べていて、わが友の長尾雨山によつて翦淞楼と題されている。今年の秋の九月、鹿叟と友人達が私のために書画会を開いてくれたのが、すなわちここである。この楼のすばらしさは園にあって、朝霧や夕立により、風景がさまざまに変化するという点ばかりにあるのではなく、市中の喧騒が風と共に伝わって来ても、来游者の耳目はまどわされることがないという点にもある。楼の東は広場になつており、草はするどい緑色をしていて、千人を集めることも可能である。広場をとりまくように良い木が多く植えられ、広場の東は菊畑となつていて、松や楓を盆栽にし、うまく並べてある。菊畑を出て数十歩も行かぬうちに園扉がある。私は鹿叟の招きにより、しばしばこの園に遊んでいるが、いつも一日中ぶらぶらして去るにしのびない。

私もまた園を持っている。蕪園といい、わが故郷にある。竹やぶ

や古い梅の樹は、長い間手入れをしていない。よってこの園を見ると、広さは異なるものの、身を俗世の外に置いて風流を楽しむこと、共にきわまりなく、私は夢の中でまた蕪園を思うのである。私は鹿叟がこの園に力を入れていることを想うがゆえに、楽しんでこれを記した。私の文は語のつくりが素朴なので、園の真の趣きを写すことしかできない。

甲寅（一九一四）十月既望（陰曆十六日）吳昌碩記<sup>(10)</sup>。

この文中に、「今年の秋の九月、鹿叟と友人達が私のために書画会を開いてくれた」という一節があるが、これはとりもなおさず白石六三郎が中心となって吳昌碩のために個展を開いてあげたということであり、しかもこれは吳昌碩生存中に開かれた唯一の個展なのである。この時の感慨を吳昌碩は「六三園讌集是日翦淞楼尽張予書画游客甚盛<sup>(11)</sup>」という詩に詠じている。

「六三園に讌（宴）集す。この日翦淞楼にことごとく予の書画を張る。游客はなほだ盛んなり」

端扁法（草書法で篆書を書く法）で草稿を作り、

大きく文字を書けばわが身が老いようとしているのを忘れる。

もっぱら武梁祠の画像石は画が古であり人が古であり樹が古であることを鑑賞し、

空を飛ぶ鳥のような私は王維が関仝を師とし関仝が荆浩を師としたことを知ってはいない。

眼は滄海がすでに桑田となってしまうたかのような激しい時勢の

移り変わりに驚いているが、

心は泰山刻石や石鼓文の書の世界に遊んでいる。

敢て言いたいのは筆を握れば蛟龍のごとく速く走らせ、

風が簾に合うようにびたりと息が合うようになることを大切にす

るといふことなのだ。

南の天のもとで私はほしいままに異物を好む癖を有しているが、東の友（日本人）は私の書を鑑賞して一筆一筆に胸中の懐いが寄せられており、

蘇東坡の書法と同じく意のままにものさされているという。

白石鹿叟は園林を開き<sup>(12)</sup>園名は六三、

酒徒は整然と水ぎわに坐る。

私の書を白壁に張れば多くの人が観てくれるが、

どこかの識者が言うように詩は疎略なものである。

友永霞峰（古玩商虚明軒主人）の案内で清らかな趣きの中を歩けば、

ただ濛には魚がおり山には栲が生えている。

坐って永字八法を論じていると手が奇しくもむずむずし、

扇を持って来て書を求める一老婆がいらないのを恨めしく思う。

思いがけない遠くからの風が海の向うの日本からやって来た鶴を

驚かせ、

舞いふる雪が寒さの中にこの時を潔白なるものとする。

目に入る書画はいたずらに相いなぶり合うので思わず頭を上げれば、

天地の清らかな気がすべてひとしく私を圧倒する<sup>(12)</sup>。

ば、

この詩から、六三園の翦淞楼の壁にことごとく自らの書画作品が張られ、多勢の人に觀賞されているのを目のあたりにした吳昌碩の興奮が伝わって来る。吳昌碩が興奮するのも無理はない。なにしろこういった経験は初めてであったのだから……。

この個展を吳昌碩の友人である清朝遺老の鄭孝胥（当時は商務印書館の取締役のようなことをしていた）が参観している。鄭孝胥「甲寅日記」<sup>(13)</sup> 民国三（一九一四）年九月七日（陰曆）の条に、

（前略）六三園に行く。日本人が吳倉碩（倉碩は吳昌碩の別字）

のために書画会を開いており、数十幅が掛けられていて、自由に入って観ることができる。李拔可、諸貞長、徐仲可、哈少甫などに遇う。<sup>(14)</sup>

とあり、日本人のみならず、中国の文化人も少なからず参観に来ていたことがわかる。また「自由に入って観ることができる」ということから、呉昌碩をロクに知らない人も興味半分で参観したことも十分に想像でき、この個展を機に新たに多くの人が呉昌碩を知ることになったはずである。

はたして個展というメディアの宣伝効果は絶大であつたらしく、呉昌碩晩年の入室の弟子・王个簪は「呉昌碩先生伝略」<sup>(15)</sup>の中で、

上海北山西路吉慶里に遷居した後、売画収入は次第に増加し、日本人の画を求める者も踵を接してやつて来た。<sup>(16)</sup>

と記している。もちろん、呉昌碩の画が売れるようになったのは六三園で個展が開かれたためばかりではないだろう。だが少なくとも「日本人」が「踵を接してやつて来た」のは何らかのきっかけがあつたからに違いなく、そのきっかけこそが六三園での個展と考えてもあながち的をはずしてはいまい。さすれば白石六三郎は、呉昌碩の書画を広く日本人に紹介した一大功労者ということになるう。

### 三、呉昌碩にとっての六三園

六三園での個展が行われた一九一四年、呉昌碩は一幅の行書幅を書いているが、その中に「聴東妓鼓琴」という詩が見える。訳出しておこう。

「東妓の琴を鼓するを聴く」

一張の琴があるところ妓女が伴つており、  
小さな閣は天空を凌ぐかのようにそびえ立ち夕日がみなぎっている。<sup>(18)</sup>

恨みが胸に満ちていることなど誰がわかつてくれようか、  
老年の心をくみはかりつつ卓文君のような日本の妓女に対してい

この中で呉昌碩は「恨みが胸に満ちている」と述べているが、これは世に遇せられないことから生じるいわゆる不平の気と思われる。清末に読書人の家に生まれた呉昌碩は、どちらかと言えば官途よりも書画家の道を進んで選んだのだが、なってみれば書画家とは、他人のためにただひたすら書画を作るだけの存在のように呉昌碩には感じられる時があつた。そんな時、呉昌碩の胸中に生じるのが不平の気であつたようだ。<sup>(19)</sup>このような不平の気をまぎらわしたい呉昌碩にとって、六三園は最適の場であつたのであろう。そして六三園で杯をあげつつ、東妓（日本の芸者）の奏でる琴に耳を傾けたのだった。

六三園には呉昌碩お気に入りの琴の名手があつた。当時の読売新聞特派員・池田桃川（本名信雄）が「呉昌碩先生」という一文の中でこのことを紹介している。長くなるので引用は省略するが、これによると、ある日、王一亭らと共に六三園で宴飲していた呉昌碩は、風雅な琴の音に接し、その音を伝つて行ったところ、叶という妓女が弾いているところに行きあたつた。それ以来、叶は呉昌碩のお気に入りとなり、宴席には必ず同伴するようになる。だがしばらくして呉昌碩が病氣となつてしまひ、心配した叶が人を介して見舞いの品を届けたところ、呉昌碩は大いに喜び、回復後、金子や反物を与えようとしたが、叶は断り、「ただ先生の画を一枚」と言つたので、呉昌碩は更に喜んだという。

呉昌碩は叶の名を題に入れた「六三園桜花斎放約貞壮一亭往游叶嬢鼓琴花下」という詩を一九一五年に作っている。叶が登場する末尾部

のみを訳出しておこう。

「六三園の桜花斉放し、貞壯、一亭と約し、往きて遊べば、叶嬢花の下にて琴を鼓す」

(中略)

王翁一亭はよく眠り、諸長公はよく聴いているが、琴は茶の味の清らかさになわなわいと言う。臧筆に茶癖があり、語がねんごろに思うところである。 どうして琴を弾くのをやめて試みに一度茶を入れてみないのか、叶よ、お前のすぐれた琴の技に茶の技を兼ね合わせるがよからう。

よもやま話をして口が渴いてもなお海の向うの日本のことを話すので、

おしゃべりな鄒衍も失笑し、酔って眠っていた李白も醒めてしま

うので、  
招きよせて私は笙を吹く。<sup>(22)</sup>

友人の諸長公(貞壯)の愛人にはりあわせたいほど叶がかわいくてたまらない呉昌碩の姿が彷彿として来る。

このような詩だけを読めば、呉昌碩はお気に入りの方と遊んでいるだけのようであるが、前述の通り、呉昌碩は胸中に不平の気をかかえこんでいたのであり、六三園で叶とたわむれることは、呉昌碩の精神安定のために必要なことであつたとさえさくとも筆者は考えている。

ちなみに呉昌碩が没する一年前の一九二六年、呉昌碩と叶は王一亭と共に六三園の一室で記念撮影をしており、その写真(図⑤)が残っている。写真のかたわらには呉昌碩の没後に王一亭がしたためた七絶一首と識語がある。訳出しておこう。

去年六三園につどい、

席は立派な客で満ち酒は樽に満ちていた。

静かに葉(叶)<sup>(23)</sup>嬢が琴を弾くのを聴いておられた、

乱後ひとり残った魯の靈光殿のように声望ある先生はただ写真の中にのみそのすばらしい姿をとどめている。

丁卯(一九二七)冬仲(陰曆十一月)に缶翁(呉昌碩)はすでにお亡くなりになっており、王猷之の没後、調子が合わなくなった琴のような気持ちである。白龍山人(王一亭の号)題。<sup>(24)</sup>

師を亡くした王一亭の心情がひしひしと伝わって来るが、それはさておき、この写真から、死の直前まで呉昌碩は六三園に通い、叶の琴に耳を傾けていたことがわかる。

#### 四、呉昌碩の白石六三郎への思い

前述の通り、呉昌碩にとって白石六三郎は、自らの書画を認めてくれたばかりでなく、広く日本人社会に紹介してくれた恩人である。また、自らの不平の気をまぎらわせる場を提供してくれている人でもある。そんな白石六三郎を呉昌碩は大切に遇した。

一九一八年の春、白石六三郎が病床についたことがある。その際、呉昌碩は「涉趣六三園賦」という詩を作り、自ら詩箋に書いて白石に贈った(図⑥)。この詩の末尾の二句には呉昌碩の白石に対する思いが込められている。

荷鋤と号した戴笠の家はどこにあるのであろうか？

もしあなたが長沮ならば二人並んで耕していることだろう。<sup>(26)</sup>

戴笠(字は曼公、号は荷鋤人)は明の人で、日本に渡り、長崎で日本の子弟を教育した詩人。また、長沮は『論語』に見える孔子が弟子の子路に津(渡し場)を問わしめた隠者で、同じく隠者の桀溺と二人並

んで農耕していたという。つまり呉昌碩は、長崎の戴笠の家を尋ねて行くと、長沮よろしく白石が、桀溺よろしく鉏を荷った戴笠と二人並んで耕していることだろうと言っているのである。呉昌碩が長崎に行った戴笠の持ち出ししているのは、もちろん白石が長崎の人であるからであろうが、この中には自らも長崎に行ってみたくらいという願望が含まれているはずである。それほど長崎出身の白石に親近感を持っていたのである。だが、呉昌碩は長崎の願望を示しながらも、その願望を自ら抑制している。なぜなら、『論語』の中で長沮は、津を問うてきた子路に対し、「孔子が知っている」と言っていて、答えないのであるから……。つまり、自らを孔子になぞらえている呉昌碩は、白石を敢て長沮になぞらえることによって、白石に長崎への案内を求めていることを示しているのである。これは呉昌碩の白石に対する配慮と言わねばならない。実は呉昌碩は阿片吸引者であったので、阿片持ち込みを禁じていた日本に行くことは不可能であった。このことは呉昌碩自身が一番良くわかっていたのであろう。だから長崎の願望を敢て抑制し、白石に負担をかけないようにしたのであるまいか。ここまでの配慮をするのも、やはり呉昌碩にとって白石が大切な人であったからだと言えは考えている。

ちなみに、この「涉趣六三園賦」詩は、手稿が白石に贈られた後、一部詩句に推敲が加えられ、横巻に大書されたもの(図③)が翌年、すなわち一九一九年に改めて白石に贈られた。この横巻の落款には「六三園賦贈鹿叟一律呉昌碩年七十六時己未春」とある。また、この詩(推敲後のもの)は呉昌碩の詩集である『缶廬詩』の巻八にも収められているが、ここでは「六三園贈鹿叟」という題が付けられている。

さて、横巻が贈られた一九一九年、六三園に特別な賓客が訪れた。日本の元老・西園寺公望(号は陶庵)である。この時の様子を前出の池田桃川が「陶庵公と呉翁」という一文中で紹介している。

(前略) 話の折を見てそこへ入って来た白石六三郎氏を(有吉明)総領事が紹介する。「此園の主人で上海第一の成功者です」と言へば、(陶庵)公はすかさず、「お陰で貧乏人が大分出来たらう」を際どい所を突つ込まれ、総領事は苦笑して二の句が次げず、白石主人も頭掻くより外は無かつた。(中略)白石主人が持ち出した沈石田の書などを見て、公はそれを説明する。そうかうしてある間に支那現代一流の文人呉昌碩王一亭の両氏が馬車で乗りつけ、公の室へ通る。両氏は何れも支那服である。(中略)撤宴後、王氏が公を写せば呉翁がそれに無量寿仏と四字を篆書で讀した。此の一幅は今も公の手に秘蔵せられてある。

西園寺はこの時、家族と共にフランスに向う途中、上海で船を下り、六三園に立ち寄ったのである。当時西園寺は七十一歳、すでに元老の名をほしいままにしていた大物であり、白石六三郎としても最上級のもてなしをしなければならぬ。西園寺は中国の文人趣味に精通している人であったので、中国の一流文人を招くことが何よりのもてなしであった。呉昌碩はこういった大物を迎えた白石の欲するところをすぐに察したのであろう。だからこそ、おそらくは王一亭を通して行われた招請を受け入れて六三園に駆けつけ、席上揮毫までしてあげたのではなからうか。

また、呉昌碩は白石六三郎本人だけではなく、白石の周囲の人も大切にしようだ。白石六三郎は一人娘の英に、長崎随一の料亭(卓袱料理)である富貴楼から婚養子・耀一郎を迎えていた。その関係から富貴楼と六三園は深いつながりを有していたのである。よって、富貴楼には白石を通してもたらされたと思われる呉昌碩書画が少なからず伝えられている。中でも注目されるのが、富貴楼主人への為書きが入っている「水墨牡丹図」(図⑦)と、王一亭によって箱書きがなされた箱蓋(図⑨)の裏に、呉昌碩の添え書き入りの名刺(図⑩)が貼られている。「蘭石図」(図⑧)で、共に富貴楼二代目・内田柴四郎に贈られたもので

あるという<sup>(29)</sup>。前者は一九一三年に、後者は一九二一年に作られたもので、とりわけ後者に付された名刺には「統本蘭一幀奉贈」とわざわざ書き入れられており、吳昌碩が白石六三郎同様、その縁戚にあたる内田家とのつながりを大切にしていたことがわかる。  
以上のことからだけでも、吳昌碩の白石六三郎に対する親愛の情が十分に窺えよう。

## 五、吳昌碩没後の白石六三郎

吳昌碩は一九二七年十一月二十九日、八十四歳で亡くなった。上海の新聞『申報』<sup>(30)</sup>は翌日死亡記事を掲載し、十二月二日付で十二月一日に行われた大殮（納棺）について報じている。この中には大殮に参列した人物をまず中国人から列挙し、次いで日本人を列挙している。日本人の部分だけを抜き出してみると、

白石六三郎、吉井民三郎、柴田六次、太倉男爵代表雲鵠与大郎、  
駐滬日本商会長米里紋吉等

となっており、白石六三郎の名が最初に挙げられている。少なくとも『申報』の判断では、白石が吳昌碩と最も近しく、かつ親しい人物であったようだ。ちなみに吉井民三郎は上海で棉花仲売業・吉井民三郎商店を経営していた奈良の人で、内外綿株式会社社長の武居綾藏<sup>(31)</sup>の紹介で吳昌碩と知り合い、多くの作品を日本にもたらした人物<sup>(32)</sup>。また、柴田六次は吳昌碩の近所に住んで親しくしていた医者であるという。吳昌碩の没後二年目の一九二九年十一月十日、三週忌にあたり、追悼会が六三園で開かれた。その案内書が残されている<sup>(33)</sup>。これによると、発起人は王一亭、哈少甫、王賢（以上中国人）、白石六三郎、友永伝次郎、土井伊八、吉井民三郎、土屋計左右（以上日本人）の計八人で、ここでもやはり白石が日本人の筆頭となっている。そもそもこ

の追悼会は六三園で行われているのであるから、実質的な主催者はやはり白石だったのであろう。ちなみに未述の人物について略述しておくと、哈少甫は海上題襟館金石書画会会長（吳昌碩は名誉会長）をつとめた友人。王賢は前出の王个簾の本名。また、友永伝次郎は前出の友永霞峰の本名で、日本からの書画揮毫依頼を吳昌碩に取り次いでいた<sup>(34)</sup>。土井伊八は上海で雑誌、肥料、棉花などの輸出を扱っていた瀛華洋行の店主<sup>(35)</sup>。土屋計左右は当時の三井銀行上海支店長である<sup>(36)</sup>。この追悼会の際、主として日本人の収蔵になる吳昌碩書画の展覧会が、以前行われた個展と同じ翦淞楼で開かれた。この展覧会を参観した文章家の鄭逸梅が「一代画師吳昌碩」の中で興味深いことを述べている。

（前略）後、昌碩が世を去ってから、同じ「翦淞楼」で昌碩の遺作展が挙行された。十中八九が日本人の収蔵品であった。私は昌碩の高弟・趙雲壑と共に赴いてこれを参観したが、雲壑は、あれは先生の意を得た作、これは自分が仿製し、昌碩が署名して印を押した作……と一つ一つ指摘した。当時の日本人は、昌碩が描く梅花、石筍、およびあちこちに枝分かれた枇杷、荔枝のあふれんばかりのあてやかさを見て、甲という人がこれを注文すると、乙という人も同様のものを欲しがり、はなはだしきに至っては、丙も丁も踵を接してやって来て、これでなければダメだと言う。このような情況に直面し、画は興がわいてはじめて作れるものであり、章法位置や色どりは思うままではなければならないと思っていた昌碩は、版木で刷るかのようにならぬ、何百枚と注文に応じて描くことをいやがり、数人の弟子に自分の画をそのまま臨摹させ、昌碩が落款を書いた。だから昌碩の作品には、画がニセモノで、題がホンモノというのが極めて多い<sup>(38)</sup>。

吳昌碩の画には吳昌碩公認の代作があったこと、および、こういっ



た代作は日本人によってもたらされたことなどがわかる貴重な証言であるが、本稿が注目したいのは、晩年の呉昌碩は、たとえ「版木で刷るかのよう」なものであっても、「何十枚、何百枚と注文に応じて描くこと」を日本人から迫られていたという事実である。それだけ当時の日本人は呉昌碩の画を欲していたわけで、これは一種の流行現象と言えよう。

こういった流行現象をひきおこした要因は多々あるが、その要因の最たるものは、やはり前述したように、白石六三郎が一九一四年に開いてあげた個展による宣伝効果であったと筆者は考える。そして更には、その個展が六三郎という上海の日本人社会において最上級のステイタスを持つ場で行われたということも、当時好景気に湧いていた上海の日本人には魅力的であったことも大きかったはずだ。

さすれば白石六三郎と呉昌碩との交誼は、単なる日中人士の良き交わりにとどまらず、呉昌碩の芸術をいち早く、しかも効果的に日本に広める第一歩となったと言えるのではあるまいか。

#### おわりに

呉昌碩と六三郎およびその主人・白石六三郎とのかかわりについては、これまでたびたびその重要性が指摘<sup>(40)</sup>されながらも、白石の事跡がほとんどわからないため、専題としてとりあげられることがなかったようだ。

筆者もここ十年余りにわたって、白石に少しでも触れている資料は根気強く集めて来たつもりであるが、いかんせん断片的資料がほとんどで、生卒年さえわからなかったため、ペンを執るのをためらっていた。ところが一九九六年夏、雑誌に連載している筆者の文章を読んで下さったことからお手紙を頂いた長崎市在住の大崎熊雄氏に白石のことを尋ねたところ、色々と調べて下さり、長崎の富貴楼が深い関係を有していること、更に白石の後裔が名古屋にいらっしゃること等々

を知らせて下さった。そこで筆者は、まず名古屋に白石六三郎の孫にあたる白石明氏（故人）夫人の喜代子女史および、明氏長男の直明氏を訪ね、貴重なお話を伺うと共に、未見の資料等を提供して頂いた。白石六三郎の生卒年月日もこのお二人から教えて頂いたのである。また、筆者は長崎にも赴き、富貴楼で内田栄四郎の孫にあたる内田恭助氏（故人）夫人の操治女史、恭助氏長男で六代目主人の一氏および一氏夫人で女将の久子女史からこれもまた貴重なお話を伺うと共に、富貴楼所蔵の呉昌碩書画を観せて頂き、発表の許可も頂いた。これで現在のところ、白石六三郎に関して知り得る限りのことはほぼ知り得たと判断し、筆者は本稿執筆にとりかかることができたわけである。以上、筆者に温かく御教示下さった各位に対し、この場を借りて改めて御礼申し上げる。

また、長崎歴史文化協会理事長の越中哲也氏、近代日本書道史研究家の伊藤隆夫氏からは、重要な証言と資料を頂いた。重ねて御礼申し上げます。

普通、論文にはこのような執筆のいきさつを書かないものなのかも知れないが、本稿は以上の各位の御助力なしには生まれなかったものであるので、敢て書かせて頂いた。もし本稿に意義があるとすれば、それは各位の御助力により、白石六三郎という一人の日本人が、呉昌碩という中国最後の文人の生涯と芸術に大きな力を及ぼしていたのだということを発掘し得たことにあるに他ならないからである。

#### (注)

(1) 一九八九年一月二十七日付『長崎新聞』「日中交流史点描Ⅰ・長崎と上海Ⅴ・諏訪神社」による。

(2) 白石六三郎の孫・白石明氏（故人）夫人の喜代子女史および長男（六三郎の曾孫）の白石直明氏によると、白石六三郎の正確な生年月日は、明治元年三月十一日であるという。ただ、明治改元は九月八日なので、三月十一日はまだ慶応四年であり、広田氏の記述は誤っていない。ちなみに六三郎の卒年月日は昭和九年四月二十六日であるという。

- (3) 前出の白石喜代子女史、白石直明氏の証言による。
- (4) 薛理勇著『上海灘地名掌故』(一九九四・同濟大学出版社) 所収。
- (5) 前出の白石喜代子女史によると、新六三は白石六三郎夫人・スエの弟で杉原家の養子となった杉原政之助が経営をまかされていたという。
- (6) 前出の白石喜代子女史によると、一九九五年に現地を訪れた親戚の方が確認されているという。
- (7) 高瀬惺軒遺稿、書論編集室編「支那遊記」(十)『書論』第二十号・一九八二・書論編集室 所収) による。
- (8) 吳長郷「吳昌碩先生年譜」(吳長郷著・河内利治、北川博邦訳『わが祖父吳昌碩』・一九九〇・東方書店 所収) による。
- (9) 「六三園記」は手稿が浙江省圖書館に蔵されているらしいが未公開で、筆者は上海美術館副館長・丁毅元氏が書き写されたものを丁氏より頂いたのでこれを底本として訳出した。なお、吳東邁編『吳昌碩談芸錄』(一九九三・人民美術出版社) にも翻字されて収められているが、若干文字の異同がある。
- (10) 原文：黃浦之西、吳淞之北、飛臺連宇無隙地。其能因地以為池沼、種樹以安亭榭、是為白石鹿叟所築之六三園。鹿叟日本人也、園之制、一為其邦俗。游者未履其園、初不知為園。蓋建築以朴勝、誠有異於世俗所謂園林者也。園之四周繚以短垣、其紆曲則籬落補之。入門有叢木、園勝在焉。循徑折而西、為園之南隅、低閣小簾、錯落其中。屋多以木制、或斷竹以代瓦、無待陶埴。一扉一椽、具有古致、蓋即以竹木為之、未嘗加以彫飾耳。唯中有一屋、塗漆以朱、則本其邦俗也。曰琴閣、曰□□、曰聽鶴軒、曰□□、此樓榭所勝者。循園之西、由南趨北、竹樹尤蔚然、聚水作沢。中有所謂濠梁、所謂流觴曲水者、則多摹襲我國之勝区。籠水以鉄網、畜水禽甚多。有二鶴、亦建築以棲之。游者無機心、鶴漸近人。旁有亭、吾書勝曰枯笠。又有二亭則所謂□□也。園中關神祠。蓋其邦俗祠祭之所在。揚旂竿於林表、境極蕭寂、過者咸敬禮焉。越神祠導往而東、踰一橋、橋以水泥治之、堅潔若石。傍水有榭、雜蒔卉木、置銅鶴於中。再折而北、有樓翼然、攬全園之勝、吾友長尾雨山所題為翫淞樓也。今年秋九月、鹿叟与友好為余開書画會、即在是。樓之勝、不僅在園、朝煙夕雨、風景百變、市声雖狹風而至、不足熒遊者之觀聽也。樓東為廣場、岫色剝碧、可聚千人。環場多佳木、場之東為鞠畦、有松有楓、植以

- 盆盎、位置咸得當。出鞠畦不數十步、則園扉在焉。余以鹿叟之招、教々游斯園、輒徘徊竟日不忍去。余亦有園、曰蕪園、在吾里。叢篁古梅、不脩治者久矣。以視斯園、広狹雖殊、然一邱一壑、皆在天壤。余魂夢亦思蕪園也。余念鹿叟勤力於斯園、故樂為記之。余之文、造語以朴、亦以寫園之真趣云爾。甲寅十月既望、吳昌碩記。
- (11) 『缶廬詩』卷七所収
- (12) 原文：瓚扁之法打草稿、大寫忘却身將老。但賞武梁祠画古人古樹古、飛鳥不知王維師全空師浩。眼奇滄海田已成、心游泰山車既好。敢云握管驅蛟龍、若風遇籟斯為宝。南天縱有嗜痴癖、東友說之却謂筆寄懷抱、坡翁書法一例同意造。白石鹿叟開園林六三名、酒徒歷歷坐洲島。張之素壁聚目觀、如一家言詩草草。霞峰道我涉清趣、維濠有魚山有栲。坐論八法手奇癢、却恨持扇來求欠一嫻。無端長風呼海表胎禽、舞雪寒暗皓此時。目中書画徒相鬪矯首、乾坤清氣一切齊压倒。
- (13) 勞祖德整理『鄭孝胥日記』(一九九三・中華書局) 第三冊所収。
- (14) 原文：遂至六三園、日人為吳倉碩開書画會、懸數十幅、恣人入覽、週拔可、貞長、徐仲可、哈少甫等。
- (15) 張謇、吳一舸編『吳昌碩画集』(一九五九・中国古典芸術出版社) および『芸林叢録』第一編(一九六一・商務印書館香港分館) 所収。
- (16) 原文：遷居上海北山西路吉慶里後、壳画收入逐漸增加、日本人求画的也接踵而至、但他依然保持原有的簡樸恬淡生活習慣。
- (17) 謙慎書道會編『吳昌碩のすべて』(一九七七・二支社) 所収。
- (18) 原文：一張琴処伴紅裙、小閣凌虛漲夕曛。思怨滿腔誰解得、老懷斟酌对文君。
- (19) このような吳昌碩の心理については、拙稿「職業書画家としての吳昌碩およびその弟子達」(『大妻女子大学紀要』文系) 第二十三号・一九九一 所収) の中で考証した。
- (20) 池田桃川『上海百話』(一九二一・日本堂) 所収。
- (21) 前出の吳長郷「吳昌碩先生年譜」による。
- (22) 原文：王翁一亭善唾語長善聽、謂琴不敵茶味清鹹雖有茶癖 謂之所善也。何不罷彈試一烹、叶爾長技相兼并。談天口渴還談瀛、鄉衍失笑太白醒。招之使來吾吹笙。
- (23) 中国では「叶」を「葉」の簡化字として使っているため、王一亭はわ

ざわざ「葉」に直して記している。この王一亭の誤りを諸書は受け継いでおり、たとえば王家誠『吳昌碩伝』（村上幸造訳・一九九〇・二玄社）なども「葉嬾」としている。

(24) 原文翻字：去年曾聚六三園、席滿嘉賓酒滿樽。靜聽葉娘鼓瑟事、靈光惟攝影留存。丁卯冬仲衍翁已掃道山、有人琴之感。白龍山人題。

(25) この詩箋は前出の白石喜代子女史が蔵されており、白石六三郎が病氣の際に贈られたものと伝えられているという。

(26) 原文翻字：荷鉏戴笠家何所、儂爾長沮便耦耕。

(27) このことについては、吳昌碩と親交のあった日本人篆刻家・楠瀬日年が、「吳昌碩翁の書齋」（『書齋』第五号・一九二六・書齋社 所収）および「吳昌碩の書齋」（『書道』第五卷第十号・一九三六・泰東書道院 所収）の中で触れている。

(28) 池田桃川『続上海百話』（一九二二・日本堂）所収。

(29) 富貴楼四代目内田恭助氏（故人）夫人・操治女史の証言による。

(30) 『生誕百五十年記念吳昌碩作品集』（一九九四・篆社書法篆刻研究会、日本篆刻家協会）所収。

(31) 島津長次郎発行兼編輯『支那在留邦人人名録』第十一版（一九二〇・金風社）および座談会「吳昌碩について」（『墨美』第十五号・一九五二・書道出版社 所収）中の神田喜一郎、小笹喜三両人の発言による。

(32) 筆者が吳昌碩の孫・吳長郷氏から直接伺った話による。

(33) 前出『生誕百五十年記念吳昌碩作品集』所収。

(34) 『書勢』第二巻第一号（一九一八・大同書会）に、友永伝次郎が吳昌碩等への揮毫依頼を仲介することをうたった広告を載せている。——伊藤隆夫氏提供資料による。

(35) 前出『支那在留邦人人名録』第十一版による。

(36) 前出『支那在留邦人人名録』第十二版および近藤達児『新支那旅行記』（一九二九・田口書店）による。

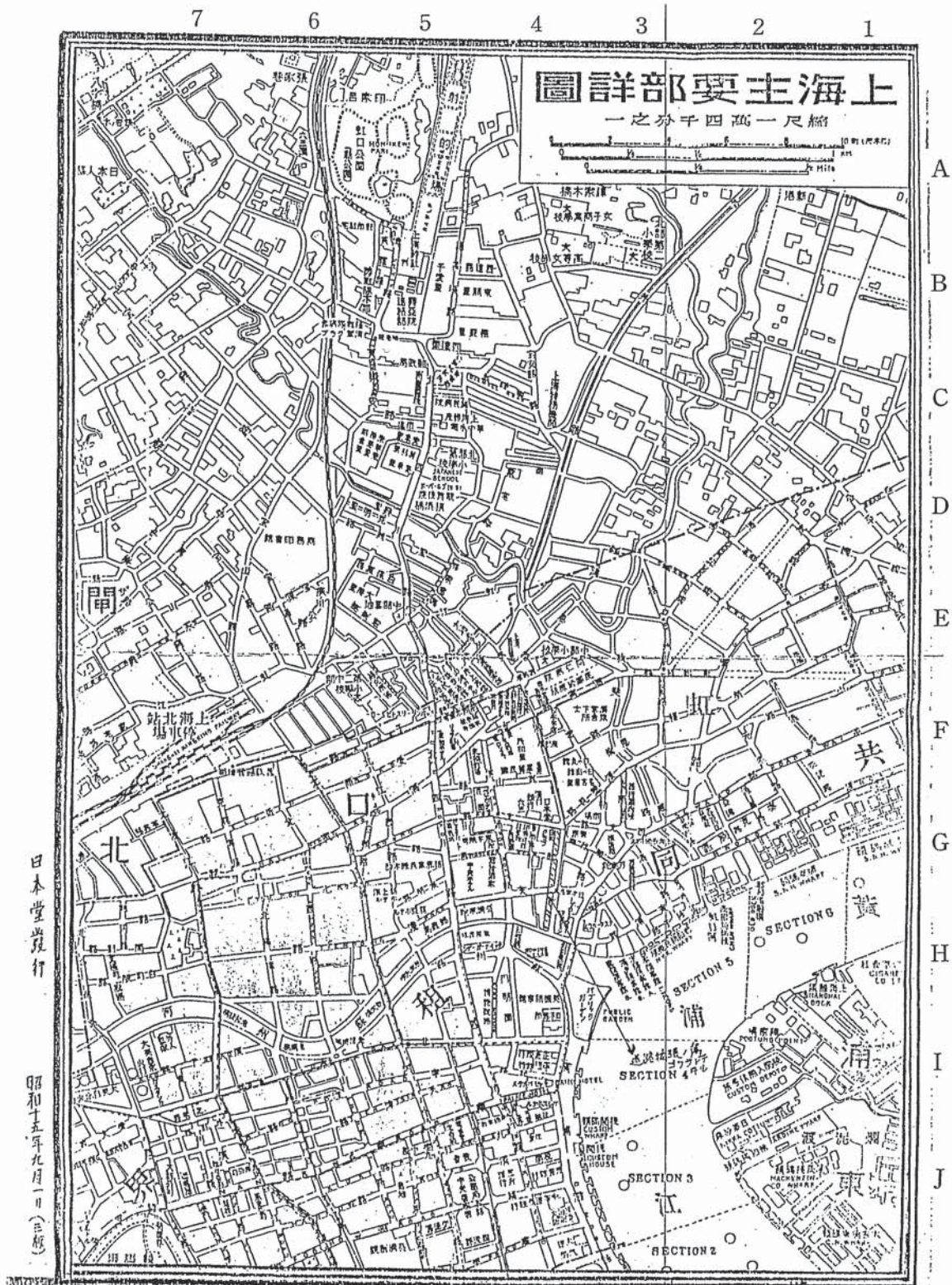
(37) 『名家翰墨』第三十七号（一九九三・香港翰墨軒）所収。

(38) 原文：後昌碩逝世、「翦襟樓」上又舉行昌碩遺作展覽會、什九皆日本人收藏之品、我與昌碩高足趙雲壑同往參觀、雲壑逐一指出某件為老師得意之筆、某件乃由他仿製而由昌碩具名蓋印。因當時日本人見昌碩所繪梅花石筍、以及離離枝頭之枇杷荔枝、鮮艷可掬、某甲定購此幀、某乙也需

同様繚幅、甚至丙、丁接踵而來、非此不可。達到這類情況、昌碩認為作畫興到為之、章法位置、点綴任意、及不願作印版式一作數十百紙、為底付計、乃由幾位弟子照樣摹臨、昌碩寫款。故昌碩作品、画偽題真是極多的。

(30) 前出の座談会「吳昌碩について」中の小笹喜三の発言による。

(40) たとえば前出の座談会「吳昌碩について」の他、朱関田「君知吾如吾知君」（劉海粟、王不穉等編著『回憶吳昌碩』・一九八六・上海人民美術出版社 所収）、近藤高史「吳昌碩と日本人」（『書道研究』第五卷第一号・一九九一・萱原書房 所収）などがある。

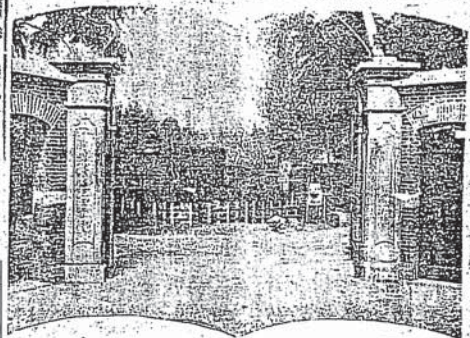


①『上海主要部詳圖』（昭和15（1940）年9月1日発行（3版）・日本堂）（白石喜代子女史蔵）A-6に「六三（花）園」、G-4に「六三（亭）」、G-6に呉昌碩が住んでいた「北山西路」がみえる。

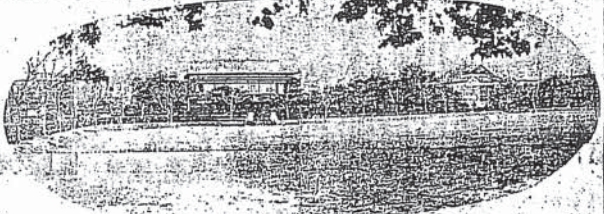
上海之人物と事業

櫻柳亂れて姪  
料亭六三、冬白石氏  
従手金業が今日の大を成した  
既往三十年の奮闘史

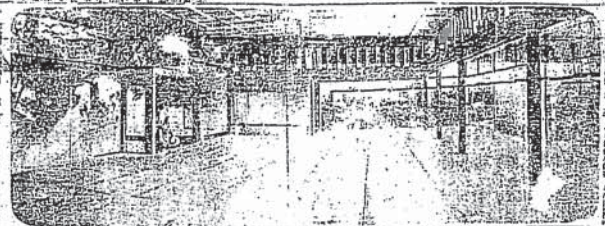
莫大な犠牲を拂つた  
純日本趣味の花園  
花に月を在る我人唯一の娯楽場  
六三花園の成るまで



白石六三郎氏と  
社會的事業  
伏見野田町金庫  
上海野田町の御屋敷に



是れ情なきや  
卓上勇往邁進  
凡ては積極的奮闘の歴史  
六三園門石の由来



御 料 理

六三園  
SHIROHOKO

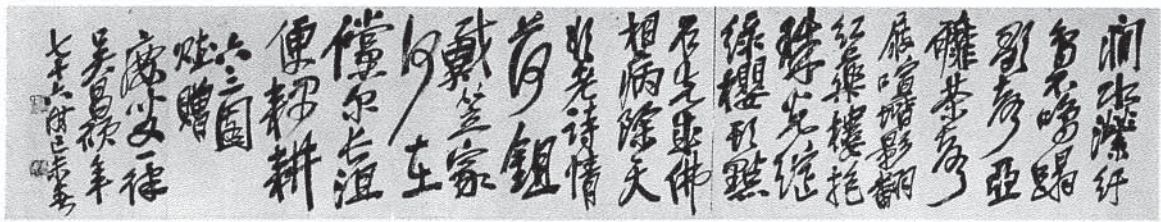
上海雲山縣江蘇路

六三亭

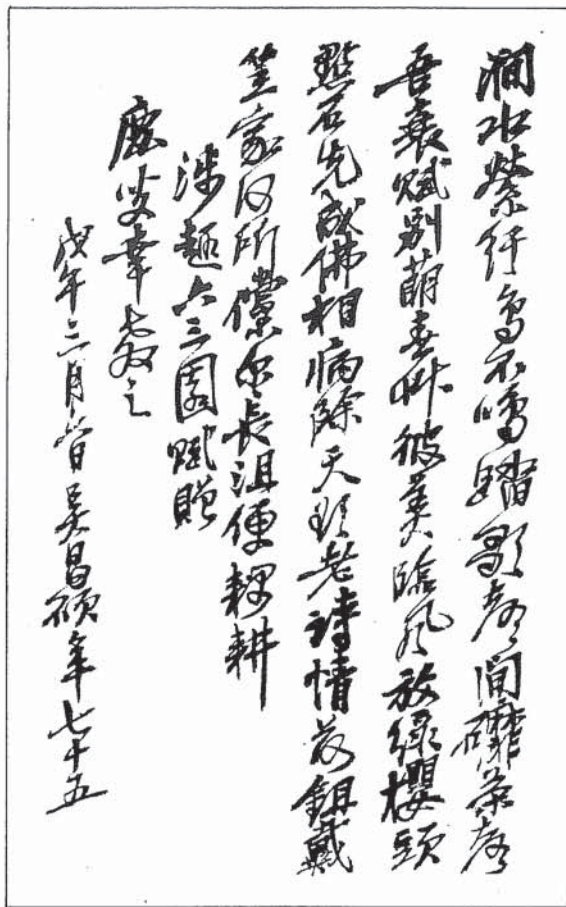
上海文路

電話 明〇一三五  
國二九四五

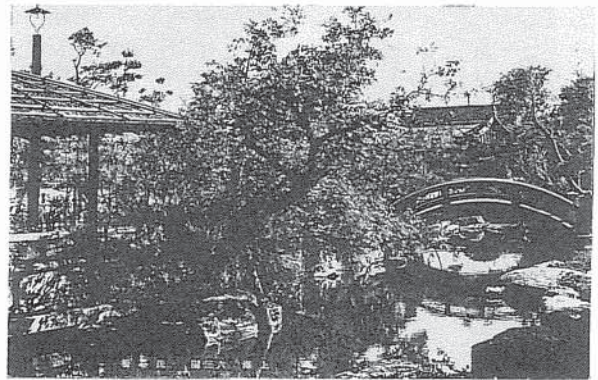
◎ 昭和3 (1928) 年11月4日付『上海日報』「上海之人物と事業」(白石喜代子女史蔵)



③ 吳昌碩「六三園賦」横卷（謙慎書道会編『吳昌碩のすべて』・1977・二女社 所収）



⑥ 吳昌碩「涉趣六三園賦」手稿（白石喜代子女史蔵）



④ 六三園（六三園製作絵葉書より・白石喜代子女史蔵）

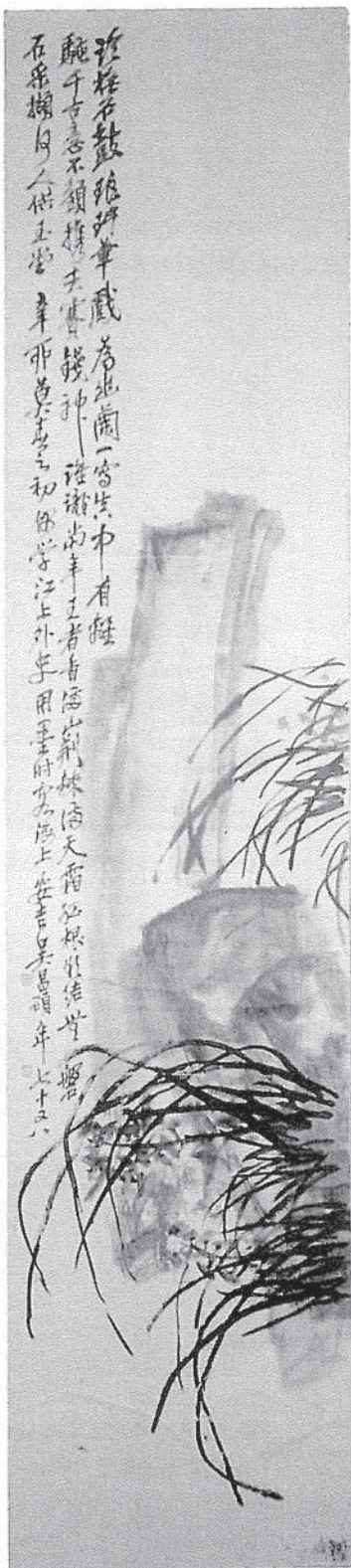


⑤ 六三園での記念写真（『書道グラフ』第38巻第4号・1993・近代書道研究所 所収）左から叶、吳昌碩、王一亭。

⑦ 吳昌碩「水墨牡丹圖」(富貴樓藏)



⑧ 吳昌碩「蘭石圖」(富貴樓藏)



⑨ ⑧の箱蓋(王一亭題)



⑩ ⑨の裏面に貼られている吳昌碩名刺

